九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# あゆひ抄の「立居」と「本」

佐田, 智明
九州大学大学院文学研究科

https://doi.org/10.15017/12383

出版情報：語文研究. 3, pp.33-41, 1955-11-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

# あゆひ抄の「立居」と「本」

佐田智明

富士谷成章の脚結抄に見える「本」は、従来用言の語幹として考えられ、深い注意も払われなかったのであるが、昨年竹岡正夫氏が〝てにをは論〟（香川大学研究報告4号）に取上げられて以来、「本」が成章の言語観の根底より出ずるもので、重大な意義を持っている事が明らかになった。今氏の御考察を簡単にふり返る事にする。

立居図は周知の如く五十音を行（たて）と段（ぬき）とに分ち、半円形の軌道にならべ、段と行とが縦横につながるように原子構造図式に配し、上からア段を立、イ段を起、ウ段を座（居）、エ段を伏、オ段を隠と命名し、各行を人間の起居動作になぞらえたものである。

竹岡氏の御考察はこの立居図から述べられる。更に、

ところで装図を見ると、「居」「来」「為」などの類や、「見」「打」、「思」「有」「遥」「早」「恋」などの如きを「本」

として右の活用表の根本においている。而してその名称のつけ方から考えられる事は、具体的な人間の在り方は常に立、起、坐、伏、隠といった形式をとってのみ存在するのであるが、それらの具体から抽象してこゝにその人間の本体が考えられるわけである。その本体は、全く抽象的に想定されるものであって、それは常に、立、起、坐等々の何らかの具体的形式（型）をとってのみ存在するものである。（中略）

換言すれば「本」が具体化してこゝに「来」「往」「目」などの活用形となるのである。逆に言えば、具体的存在である「来」などを通じてそれらより抽象して、概念である「本」が想定されるのである。従って「本」とは活用形と同次元に考えられるべきものではない。たゞ、これらの「本」である語をあげて説明する時、「打」「思」「早」「美」などといったのでは明確でないから、終止形のウ段や、シの語をつけてあるが、その場合、それは活用形である終止形の語と考えるべきでなく、単なる「打つ」「思う」「早い」といった対象の意識としての概念として考えるべきである。

（てにをは論14－15頁）

かくして

「本」は決して単なる用言の語幹だけを言うのではない。それは例えば、英語の I, my, me 共に有している「対象の意識」である「私」といった様な概念を表わす語であって、それは文以前のものであり、いわばそういう語は、対象の意識としての概念につけられた名称に過ぎず、ソシュール的に言うなら Langue の世界に在ると言ってもよさそうなものである。（同16頁）

全く卓見で教えられる所が少くない。氏の如上の御説中に、特に注意すべき事は、氏が言語の本質観と文法現象の説明との識別に気づかれている点である。しかし、「てにをは論」が「詞辞批判」の副題によつて示されるような御趣向であり、これ以上の論究は見受けられない。ところがこの問題は誠に重要な事であるので、以下にわたつて考察し「本」と「立居」をめぐつて成章の言語本質観と文法現象の説明との関係を解明しようと思う。

氏の主として立居図から考究された問題が「説明するため」に書かれたあゆひ抄本文において如何なる形であらわれているかに注目したい。そのためには、装図と本文の間にどのような関係があるかという事も手がかりとなろう。

装図の「本」と「末（すゑ）」、「引（ひき）」、「靡（なびき）」、「往（きしかた）」、「目（めのまへ）」「来（あらまし）」とは、結果的に見て、大体今日の語幹対語尾の関係になつている。見、来、為の如きは装図に「無末」となつているが成章が、「無末」と記した事実によつて、「本」に「末」の機能を含ませたと考えられる。右の事はあゆひ抄本文の説明からも考えられるが、

無末は本に末をかねたること、よそひ抄にいふがごとくなれば云々（伺らん稿本63オ）（註1）

によつて明らかである。なお「無末」以外の装は「本」と「末」とを分つて示される。

更に氏が説明上の便宜によると説かれた「本」即ち、語幹相当の「本」が脚結抄本文に多くみられる。而して、その場合成章の「本」の範囲にずれがある。

令身「何む」の接続を記した所に、

やがてむすゑの装となれば、何は装の本也但状をうけたるぞおほき芝には本鋪には末を承（五ノ十八ウ）

とあるのに従うと、鋪（しきざま）の「楽し」に「む」がつけば、鋪末は「本」とならざるを得ない。即ち鋪末の「し」は「むすゑ」がつく時は、「やがてむすゑの装」となつて、勢い「本」の中に含まれると言えるのである。次に「かへしざま」を例に取る。「かへしざま」は竹岡氏の如く（国語国文一七ノ八、富士谷成章のかへしざまについて）打消の「ぬ」が装について一つの装になつたものとすべきであろうが、すると、「ぬ」は不倫のあゆひであるから、装の来（あらまし）に「ぬ」がついたものとも見られる。しかして「知らぬ」は同時に「かへしざま」の「本」である。御杖の脚結抄装図解でも、「ぬ」を「本」としている。かくて「ぬ」は「本」に含まれたり、「あゆひ」

になつたりする。

次に「在の本」や「にもと」（例えば「ハルカニ」以下形容動詞の例として）ハルカナリを用う）は

(1)〔何に〕何は名、頭、脚、引靡往又はやがて在のにもと也、状の末をうけていふ人なしにかる人なしになどよむ事上つよにおほくみえたり（二ノ十六ウ）

(2)〔何にて〕何は名状のもと又やがて在のにもと也（二ノ十七オ）

(3)〔何のみ〕何は名頭脚装の引靡往又は在のにもと等なり（三ノ八オ）

(4)〔何なん〕何は名頭脚装の引靡・状の往・在のにもと等也（三ノ十七ウ）

(5)〔何なから何なからに〕何は名事の往孔在の末又は往又在芝の本又引鋪の末又は靡・頭脚等さま〴〵也（三ノ二十ウ）

(6)〔何にあり何なり〕何は名頭脚装の引靡等也又在の本末やがて此詞なり（中略）「にあり」「なり」二詞ひきあひて只同じことばなり（四ノ十九ウ）

(7)〔何て〕何は脚装の往在のにもと也（五ノ四オ）

(8)〔何ら〕何は名脚頭芝の末鋪の末在の本等也（三ノ七オ）（中略）在には「よにまれら」など拾遺によめり「みねもたひらに」などいふ詞も是に同じ（以下略）（三ノ八オ）

など、かなり例を見る事ができる。(5)の「何」、即ち、「ながら」「ながらに」の「在」からの接続は、本、往、末、引、であるが、こゝで「本」は「ハルカ」である。(8)〔何ら〕では明らかに「ハルカ」相当の語が「本」になつている。(6)の「なり」は「本・末」を含んで、そのまゝ「在」となつている。(1)(2)は「に」が「在」の「にもと」になる。(3)(4)(7)においては「在のにもと」として、「に」は「本」に入れる。

装例（稿本95ウ竹岡氏、国語学21輯所収論文参照刊本の装図にあたる）には「遙カ」と「遙カナ」とが併記されているが、装図では「遙かな」だけを「本」としている。かくて三つの「本」「ハルカ」「ハルカナ」「ハルカニ」が考えられる。

装図に「はるかな」が残つたのは、共通部分を極度に抜き去つた結果であつて、そのため「にもと」は記入できなくなつたのではあるまいか。九大本書入（註2）には装図「在」の「本」に朱で「に」と入れてある。これでは「末」以下の立居に合わないが、書入れの性格上やむを得ない。もつとも、あゆひ抄おほむねに、

(9)有名ありさまはりもじを末とす、たゞしありさまはにもじを末とするやうもあり（おほむね九オ）

と云うが、この「末」の「に」は文が切れる場合、語の末尾の部分を活語尾として分出したものと考えられる。そうすると、前の極度に切りつめたといつた事に矛盾しない。しかして、この場合の「本」は「ハルカ」である。

次いで「立本（たちもと）」（カリ活の語尾）は

〔何くあり何かり〕何は芝の本鋪の末なり「く」は状の往「か」は「くあ」のひきあひにて二詞全く同じこれを装の立本といふ（四ノ十八オ）

と本文に見える。「早」「恋」を例にとって見よう。装図から言うと、「早か」「恋しか」は「立本」で、更に区分すれば、「早」「恋」は「本」、「恋し」は「末」となる。しかし、一方では「かり」を「立本」であるとしている。のみならず、「かり」は有倫のあゆひである。しかして、「カ」だけが装図に入つているのは、やはり派生部分、即ち、「かり」の ら・り・る・れの立居の部分を切りすてたのであろうと解する。

立本に関連するものに「伏目（ふしめのまへ）」がある。伏目の「け」（装図）、「けれ」（有倫・何けれ）は、前条の「かり」の立居である「かれ」から出た。

〔何けれ〕装抄にいふ状の伏目これ也（中略）只前条（筆者云何くあり、何かり）のごとく「かれ」とよむべきを、下の「れ」もじにひかれて「け」といへり、このゆゑに「けり」「ける」「けら」などは立ゐず。又「れ」もじにひかれずして古今に「すぐる月日はおほかれど」などもよめり。（中略）万葉には「けれど」を「けど」とのみよめり、ふせる詞やがて「有」の心をそなへたるは、もとより目のことわりなり、（四ノ十八ウ―十九オ）

即ち「け」は立本「か」の訛りである。しかして「けれ」は状の「伏目」であると同時にあゆひの有倫である。「立本」「伏目」については問題があるが別の機会に譲る。

さて、如上の考察の中で「立本」「か」、及び在の「にもと」においては、「本」が重複するように見える。が、これは「在本＋に」が「在のにもと」、「状（鋪末又は芝本）＋か」が「状の立本」であると考えるべきものであろう。前に示した令身「何む」の場合に「む」がつくと、「む」まで含めて「末（きしかた）」としたのと同じだと考えられるからである。又、装の「往」が装図の「本＋往」を意味するのと同じである。（例えば「打つ」の往は図に従えば、打（う）（本）＋ち（往）である）それでは何故「芝本（しばま）＋か＝立本」と考えてよいか。こゝで「よそひ」が「あゆひ」を含むという一面を考えるべきであろう。

被身令身は脚をとりぐして靨ある装となして見べき事口づからつたへらる（五ノ十七オ）

即ち被身の「る」「らる」令身「す」「む」が、用言の一部、即ち動詞の活用語尾であるとみてよいと考えたのである。菊沢季生氏の紹介になる「三身図説」にはこれら脚結と複合した活用図表が記されている。（詳しくは、文学九巻三号「装抄と三身図説」参照）

従つて、例えば次の如き例、

〔何ゆく〕「ゆかば」「ゆかん」などの立居 見本抄（由久身（ゆく）、五ノ十五ウ）

において、「……してゆく」の意の「ゆく」の立居として「ば」「む」を含めているのも、同じ考えに出るものと云えよう。

先の「状」の「立本」、「伏目」が同時に「有倫」の脚結ともなつた事もこの間の事情を示すものである。

かくの如く、脚結が装に含まれるという一面は、後に述べるような「概念性」中心の考えからであるが、それはとにかく、装の一部となる脚結の立居は、自然特異なものになつてしまうのである。成章が「装にかよふ脚結」という面が、前述の「装に含まれる脚結」から導かれるからである。おほむね十一オに

又日脚の装にかよふこそおほかれ末靡をたてゝ心うべし、つ・す・ぬ・く・かぬ・らる・しむなどは末なり、つる・する・ぬる・くる・かぬる・らるゝ・しむるは靡也（以下省略、なおこの原形は同じ趣きにて、稿本85ウに見える）

こゝで靡というのは、成章考察の出発点では、

(イ)ナビキ　ヨソヒノアシ也　キエユルミユル等ヲ云　スエノ上也（稿本表紙裏）

と記されたが、

(ロ)あかなん（筆者云、あ段からつゞく「なむ」ー即ち誂の「なん」が四段活用につゞいたのをいう。よそひ「あか」になびかぬはたまたま「をこなん」「えけなん」になるもあり（4ウ）

の如き語尾を屈折させるのにも用いた。が次第に(ロ)は「引き」に近づき、(イ)の形が、連体形の添加（ル・レ）になつて、更に、語の位置に結びつき、「末」と「靡」とが対立を示すようになつたが、係結の結びにくることに想到して、刊本の靡となつていつた。——と想像される。この過程を示すものに、装の一面を受持つ脚結の一つ「ぬる」（完了）がある。

(イ)何ぬる　詞の終には「ぬ」といふを詞の中にては前後をつなぎてぬるといふ事なりもじの例なれば里言「ぬ」にかわることなし、（詞の終・中の心得はたゞよそひのなびきと末との心也）但直になびきといふべし終中の説改べし終にも何ぞ何ぬるなど用ればまぎらはしき歟（58ウ）〔原本、（　）ノ部分抹消ス〕

しかし「終中」の考察はあゆひ抄の説明の中に根在していると見られ、特に稿本では、

(ニ)とは最末や、やは、やぞ、か、かは、かも是等は末也（85オ）

又、あゆひの装に通ふ例（助動詞を殆んど）をあげ、その頭注に、

(ホ)此外のあゆひはみなあゆひのもとゝいふべし（85オ）

という。(ホ)は「もとあゆひ」とも云い、

(ヘ)一、あゆひさまゞゝなるうちにもとあゆひ末あゆひうちあふあゆひのみつあり（89ウ）

竹岡氏（国語学21輯九十一頁）によると、「もとあゆひ」は格動詞の類と考えられるが、装の本・末・靡と（考察の出発を考えるとき）相通ずるものがあろう。更に文末に来るのを「末」とし、文中に来るのを靡として扱う考察法は、今日の助動詞

相当の脚結に見られることは、前述のおほむね十一丁ォの例からしても考えられよう。ところが、刊本の装においては、今日同様に一語の活用として統一されてきたものでも、脚結においては次の如くなお不完全なものとして残っている。

A何ず　すゑては「何ず」といひなびきては「何ぬ」といふ（不倫、四ノ五ウ）

おほむね十一ウ　又不倫ず・じは末也ぬざるは靡也

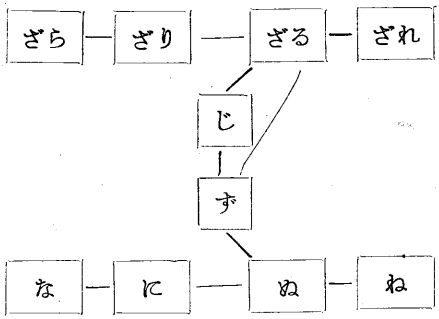
B何み何み（筆者云降りみ降らずみの如き「み」）すなはち「も」の立居なるべく見ゆれば此家にくはふ（毛家二ノ十五ウ）

Aの類は他に多くの語例がある。すべて、「装にかよふ脚結」であるが、「通ふ」というのは火と湯のかようようなものであるとし、脚結の装的な一面に過ぎないとした。（おほむねハオ・何つ・五ノ十七オ）この「通ふ」の論は「通別論」として稿本にも見える。（86ウ・96ウ・99オ　内容は刊本と同じ）Bの類は音通の立居である。脚結の立居には結局、Aの型とBの型とが併せ説かれるわけで、AB両型によって立居を見てゆく時に、更に別に複雑な相を呈してくることがわかるのである。脚結は「かへしざま」に入るべき「ぬ」を始めとして、装図の中には記入されず、「靡」「立本」「伏目」のみしか記されていない。というのも、装の分類に役立たない、（たとえば令身「む」をつけた鋪は分類すれば有末有靡のグループ）という装図の性格にもよるが、これには先に述べた「あゆひ」の立居の性格が深く関係していることを挙げねばならない。然らば、あゆひの立居は装図の立居とどうちがうか。それは、a脚結が「形」をもたない事及びb立居することによって語性を変える事の二つの面である。

先ずaについては、九大本御杖書入れに、

装いぬ　形ニツキテ義ノアリ　イヌルモノガアルナリ
脚ぬ「ヌ」トカハリテ形ナキナリ（おほむね上、二オ）

とあり、装と脚結との区別が「形」の有無即ち概念性の有無によっているのを見ると、概念的な共通面が稀薄である所の脚結を同一語であると意識させる条件は、観念的な近似（打消とか回想とか）と、音的近似（じ、ず、など）に頼る外はないし、もし、この二つの近似によって語相互の関連を認める時「あゆひ」は夥しい「立居」のグループとなってしまう。今不倫の例を刊本で示すと、図の如くなる。（あゆひ抄おほむね下及び不倫の立居の例による）




第二に脚結の立居は語性を変える。

〔何つる〕「何つ」は末なり「何つる」は靡なれば、立居としてとくべけれど心得いさゝかかはるべきによりて条を立つ（五ノ八ウ）

の例から、脚結が必ずしも「装」式の立居と同日に考えられていない事がわかる。

〔何じ〕「じ」は「ず」の立居なり（四ノ六オ）（不倫）

「じ」と「ず」の語性は大いに異なる。にかゝわらず一語のたちゐである。もつとも、「何ぬ」と「何ぬる」（去倫）のように区別されていない場合もあるが、

「まし」又「む」の立ゐなれば心得かはらず（65オ）

「べし」「べき」等はおなじ心得也「べく」「べかりけり」のふたつはいさゝかの心得あり、もとより同じ詞なれば、里に同じ詞をまはして心うるにたがふべきにあらねどあゆひの立居につきて尺もさまゞ〳〵なるべき勢をいふべきなり（69オ）

の如き、稿本の例を参照すると、やはり、立居と語性とが、厳密に対応していないと考えるべきであろうと思う。

一方、装図に靡のみを記入してあるのは、第一に状は「鋪」と「芝」を比較すれば明らかで、全くの同形となっているし、「立本」「伏目」は「事」の「靡」と共に補助成分と見られるものであるのに依る事、勿論である。稿本、「何かり」の頭注に

有類「ある」といひて「さはる」「かはる」を出すべけれど、さいひては、よそひあゆひまぎるべければ「かる」のみをいふ（87ウ）

とあるのも参考にできよう。因みに、「あるといひて」の「ある」は、「さはる」「かはる」に含まれる「ある」で、「さはる」などの語尾を「あゆひ」として説こうかと迷ったのである。註(3)

かくの如く「あゆひ」を不純物として抜き取られた装図は、一段と断面図的なものとして考えることができる。然して、その結果として竹岡氏が実質概念として示された以外の「本」――即ち語幹相当の「本」が現われる。

立居図の立（来）、起（往）、居（末）、伏（目）、隠（活用形なし）の如き、音と活用形（記したもの（　）の中に）の対応は、四段中心であり、他の活用（二段活用など）には通じない。いわば五音を相通させる指針である。故に、

〔何らん〕「ら」もじ靡をたてたるに似たれど靡なき詞をもたぢにうくれば、べちの詞也（四ノ十三ウ将倫）（〇印筆者）

の如く用い、あゆひの立居に用いることができたのである。一方装図は「靡」や「末」の有無によって分類した立場にあり、共通部分をぬきだした為に、「本」、たとえば「打つ」の「う」は、何らかの意味で語幹に近づかざるを得ないのである。

それでは装図の「本」の実質概念と、語幹相当との間にど

ういう関連を見るかというに、「ハルカ」「ハルカナ」「ハルカニ」の三つの「本」や、「楽し」（「む」する「本」となるがつくとき）「楽（たの）」の二つの語の例ほか、前述の考察になる諸例における各の「本」が伸縮していることである。然して、それらの「本」を一語として支えているものは、意味的同一性である。「本」が伸縮し、附加する脚結が裾について活躍する時、その語は類々の勢いを示してくると見られると思う。

（註4）

結局、あゆひの立居相通と装図の立居の差が、装図の「本」を決定し、概念性を中心とする時脚結は装に含まれ、文勢によつて、脚結は一文の陳述を決定すると云う事ができるものと思う。

〔註〕

あゆひ抄には、成章の術語が多く出てくるので、不馴れの方には解りにくいかと思うが、術語の解説はわずらわしかったので一切省略した。手近かなものには、「国語学大系十五巻」「松尾捨次郎博士校註あゆひ抄」など参照していたゞけると幸いである。なお、刊本からの引用は和数字で、稿本からの引用は洋数字とした。

註(1)稿本あゆひ抄は竹岡正夫氏の御好意によつて、写真版を九州大学へ譲っていたゞき、親しく拝見できた。稿本に関しては国語学21輯に「稿本あゆひ抄と刊本あゆひ抄の成立」と題して氏のすぐれた論考があるので、参照していたゞきたい。本論中で国語学21輯といっているのはすべて氏の右の御研究をさす。

註(2)九州大学図書館にある書入本は御杖の識語があるもので、書入者には、御杖、美楯、成孚、比礼雄の名があり、書入の順や数などから美楯の転写になったものゝようである。内容には「稿本あゆひ」と同一のもの、俳諧天称波抄と同一のもの、あゆひ抄裏と同一のものなどがある。

註(3)装図　来（あらまし）の段のうち「寝（ね）ーな・ね」「思（おも）ーほ・は」「越（こ）ーえ・や」では二語が併記されている。右のうち、「な」、「ほ」、「や」は「す」・「ゆ」につゞく形を意識したと思われる。「さはる」「かはる」の「アる」が脚結として説かれなかったのと表裏していると考えてみると興深い。ちなみに、この両種の装は装図では即ち有末無靡の「事」のグループに入るから問題ない。

註(4)『よそひには心得べき事あり。「きく」と「きこゆ」とは末なびきにあらず別の事也。「見ゆ」と「みる」、「すつ」と「すたる」の類也。世人漢字によりて混同しておぼゆる故に此説我が国のことだまをよくしる人ならではあやしみおろどくべし。たとへば「かたし」「かたむ」の詞は堅固の字二つにかけど同じくおぼゆるに、「あつし」「あつまる」同じ勢なれど、厚集の二字なれば同じかるべしと思ひもよらぬ例のもじにあやまらるゝ也。扨もとより「みゆ」「みる」も一ことなることいふをまたねど、末靡の例を思ふに、是ひとつなりとしていはゞ、漢字の十字体も一詞なるものあれば、かへりて世

人まどふべければなり。（98オーウ）』

右の例で成章が「同じ」という場合と、「別」という場合基準が別である。前者は意味的近似、後者は末醒という形式的差異である。

例えば「かたし」「かたむ」の「かた」は同じ「本」であるが、「し」（「芝」になる）「む」（「事」になる）がつくと、二つは別個の装になる。このような解釈は許されると思う。誤解をさけるために更に他例を持ちだすと、楽しむ、楽します、楽しは各々別個の装であるが、それぞれの「本」は○○印をつけた部分である。然して「楽」という概念においてのみいえば同一語である。

**後記**―この論文は去る五月の九大例会にて発表した「あゆひ抄における立居」を稿本によつて検討し、手を入れたものである。拙論の成るに際し、これまでに一方ならぬ御指導をいたゞいた福田良輔・春日和男両先生、並びに稿本「あゆひ」を譲られ貴重な雑誌を賜わりいろいろ御示教下さった竹岡正夫先生の御厚恩に謝し申し上げる。